

『源氏物語』の研究―物語空間へのアプローチ―

広島大学大学院文学研究科博士課程後期 加藤 伸江

本研究は、『源氏物語』の舞台を想定・考察していくことで、『源氏物語』の読解を深め、作者や当時の読者が思い描いていた風景の形を具体化する作業を行うものである。本研究で考察した結果を以下にまとめる。

第一編では、作者が宮仕えの日常から創造した六条院を具体化する研究を行った。個々の場面を取り上げ、詳細に考察し、想定図に反映することを試みた。

第一章「町ごとの役割についての考察―儀式における六条院の入口―」では、まず、六条院で催される儀式について町ごとに区別し、入口に注目して概観した。秋の町を会場にした「中宮の御読経」、「明石姫君の裳着」の場合、春の町と連携して行われ、入口は大路に面した春の町であった。夏の町を会場にした儀式は、夕霧が主催する場合である。春の町を会場にした儀式の多くは源氏が主催する。儀式を行う入口に当たる町は、春の町と夏の町であった。六条院の晴は、大路に面した春の町と夏の町であり、当時の貴族邸宅の構造を反映したものとなっている。六条院四町は、それぞれ独立した一町の邸宅を構えながら、時に六条院全体で、その時々に応じた連携で以って、源氏や夕霧らが主催する儀式を支える。六条院で行われる儀式の入口を考察していくことで、一町ごとの役割が鮮明になったと考える。

第二章「六条院行幸場面の再検討―馬場殿の規模と廊の改築についての考察―」では、馬場殿に加えて馬場・厩についても考察し、中の廊の壁を崩した源氏の演出について検討した。図に示す作業によって、源氏の冷泉帝行幸に対する思いが表現できるのではないだろうか。源氏は、冷泉帝の御代が節会でも些細な遊びでも、この帝の時から始まったのだと後の人が言い伝えるような趣向を催し、栄えた代にしたいのだと考える。ゆえに、六条院の馬場殿を、宮中の武徳殿を模した形に想定した案を提示した。さらに、秋の町の紅葉を見せるために、廊の壁を取り払う演出をしたと考えた。

第三章「六条院夏の町西の対の妻戸の間と隅の間について―玉鬘を垣間見た場面の記述から―」では、蛭兵部卿宮と夕霧が玉鬘を垣間見たのはどこかを検討した。蛭兵部卿宮は邸外から来た客人なので、大路に当たる東側の門から入ってきたと考える。一方、夕霧は野分の見舞いをする源氏に従って六条院内を廻って訪れている。春の町にいた源氏は夕霧とともに、秋好中宮が住む秋の町を訪れ、そこから明石の御方の住む冬の町を訪れている。野分の見舞いで訪れた夕霧は六条院の身内であり、蛭兵部卿宮は客人である。妻戸の間と隅の間は、異なる位置にあるのではないか。格子を上げた所に御簾がかけられており、隅の間が必ずしも妻戸の所にあつたとは言えない。妻戸の間は来客用の空間であり、妻戸があるからと言って妻戸の間とは呼ばない。妻戸の間と隅の間は、間としての機能が異なり同一に扱われる空間

ではない。妻戸の間に通した蛭兵部卿の宮には、源氏が蛭の光で玉鬘の姿を見せるといふ演出をした。しかし、隅の間の夕霧には玉鬘に言い寄る源氏の姿を見られてしまうのである。表向きの空間である妻戸の間では演出が可能であったが、隅の間では普段の源氏の姿が露わになったのである。空間の使い分けがなされていると考えられる。

第四章「蜻蛉巻における女一の宮を垣間見た場面の検討―馬道の方からの薫の視線について―」では、蜻蛉巻の女一の宮を薫が垣間見る場面を検討した。亡き光源氏と紫の上の追善法華八講の後片付けが行われている間、女一の宮は春の町の西の渡殿に居た。釣殿の方からやって来た薫は、そこで女一の宮を垣間見ることができたのである。釣殿からどういふ経路で近づき、どのような視線で女一の宮を垣間見たのか。「国宝 石上神宮撰社出雲建雄神社拝殿」を参考に馬道の構造について検討した。馬道は殿舎の中央部に貫通して設けた通路であり、切馬道は殿舎をつなぐ長橋などに設けた取り外し可能な通路なのである。蜻蛉巻の馬道は、西の渡殿を貫通する通路であり土間であると考えられる。池からやって来た薫は反橋の下をくぐり、女一の宮の居る西の渡殿にたどり着くという経路を一考として提示した。女一の宮と薫は同じ高さにいない。一品の宮である女一の宮と薫の身分の隔たりが描かれている。さらに、馬道が建物の込みあう春の町に必要なということも推測された。女房の局がある西の対とは、馬道で区切られていたのではないか。馬道は、蜻蛉巻の本文に書かれているにも関わらず、先行図において場所が示されたことはなかった。六条院想定配置図私案に春の町の寝殿と西の対の間の渡殿に馬道を設けることとした。

第五章「若宮誕生後六日目の移動について―産養の儀から見る冬の町―」では、若宮誕生後六日目に冬の町から春の町へ移動した理由を考察した。明石女御の出産は当初春の町で計画されていたものであった。女御の体調が思わしくなく、やむなく冬の町へ移動して臨んだ。冬の町に移動したことによって、尼君と語る機会を得る。若宮が誕生した直後の本文で春の町へ戻る計画が語られるが、移動は六日目になった。陰陽師のすすめにより春の町に戻ってよい日が六日後だった可能性もある。三夜・五夜は冬の町で行われたが、七夜を前に春の町に戻ったのである。産養七夜は内裏が主催する重要な儀式である。

明石の御方が住むために造られた冬の町は、娘明石女御の立場を含め、ほかの殿舎に劣らない設備にしたのだと語られている。しかし、若宮誕生の産養の儀の会場の移動によって、冬の町は春の町に比べ劣っていることが示されることになる。産穢の七日間を過ぎたのちに、他の場所へ移動することが一般的であったにも関わらず、誕生後の六日目に六条院の冬の町から春の町への移動を行っているのである。これには、春の町と冬の町の決定的な殿舎の格式の違いが表されている。冬の町には大きな対二つがあり、廊をめぐらしてあると語られる。寝殿があるとは語られていない。この寝殿がないことが略儀となる理由であり、春の町との大きな違いではないか。さらに、大路に面した春の町に比べ小路に面している冬の町は目立たなく、客人を招くにも牛車の出入りなどの制限があったのかもしれない。これらの理由から、源氏は産養の儀をより格式の高い春の町の殿舎で行おうとしたのだと考えられる。六条院内を移動する場合、秋の町は秋好中宮の里邸であるため、中宮の町は通らない。冬の

町から花散里の住む夏の町を通って行ったのではないかと考える。

第六章「町」・「間」の読み方の考察―「四町（よまち）を占めて」を発端に―では、六条院の「四町を占めて」を発端に、「町」という語の示す意味と読み方について考察した。加えて、「間」という語についても考察した。貴族の日記など記録は主に漢字で書かれている。一方で平安時代の物語は、主に仮名で書かれているため読み方が分かる。『源氏物語』の伝本の表記は、「よまち」と仮名で書かれており、「よんちよう」と仮名表記された本はなかった。『源氏物語』に影響を与えたと言われる『うつほ物語』前田家本によると、「まち」「ちやう」と表記が使い分けられている箇所があった。現在の活字本テキストでは「町」という同一語に校訂されているが、写本の記述によると、二つの表記が明確に表れているのである。吹上の宮のありさまを語る場面において、海岸に沿った松の立つさまが「甘ちやう」と記され距離を、林が「はたまち」と記され面積を指す語であると区別できる。「まち」と読む場合が面積を示し、距離を表す場合が「ちよう」と区別されていたのではないか。「町」という語の読みを区別し、意味の特定をしていた可能性も否定できない。

「間」に関しては、長さを示す語である「間」を、『源氏物語』では「ま」と読んでいることを確認した。さらに、『源氏物語』において、長さ・面積とも「ま」と示していることを確認した。足利義政の東山殿「嵯峨の間（九間）」など、室町時代の住宅について川上貢氏の研究があるが、「間」の空間は室町時代に現れたものではなく、平安時代から存在していたと言える。

第七章「河原院の池とはどういうものか―六条院の池への影響―」では、源融の河原院について考察した。河原院とは、塩竈の景観を模し、海水を運んで塩焼きを楽しんだ邸であると紹介されている。六条院の池は、胡蝶巻の舟遊びで、舟を「唐の装い」にし、棹さす童の髪を角髪結いにして「唐土」の風情にしている。塩竈の浦を模したと言われる河原院の池の姿を、六条院の池では踏まえていないのである。塩竈ではなく、異国を想起させる池の姿を描いているのである。河原院が塩竈の浦を模したと言われていることを、紫式部も当然知っていたはずである。しかし、六条院の池にはその景は踏襲されていない。河原院のあった場所や規模、一世源氏の造営など、河原院が六条院の準拠であることは『河海抄』が記すところであろう。しかし、池に限定して見ると、塩竈の浦を模したことや潮水を湛えていること、毎日三十石の潮水を運んだことなど、今日伝えられている河原院の池の姿が六条院の池には反映されていないのである。これは、河原院の伝承が変遷していることによるものであり、紫式部の抱いていた河原院像が今日の伝承とかけ離れていることが原因であろう。当時の認識に近づく検証が必要であることを再認識した。

第二編では、都を離れた須磨や宇治の周辺地に描かれる空間の考察を行った。

第一章「茅屋は源氏の造営か―須磨の住居想定図私案―」では、源氏の不遇時の滞在場所として須磨と明石が並び称せられることが多いが、全く違う景であることを明らかにした。須磨の住居は茅屋であり、明石の邸は都の風情と通じるという。源氏が造営した六条院は檜皮葺きの邸であった。それに比べ須磨では茅屋という馴れない住居に住むこととなった。茅

屋という建物についての用例などから、明石の邸との違いが見えると思われる。そのほか、廊か屋か判別のつかない建物も在り、源氏の見馴れない空間となっていたことが分かる。須磨の住居を源氏の造営だとする説があるが、源氏は須磨の暮らしを能動的に創造したのではない。須磨へは謹慎する意で下っているのである。『一葉抄』『弄花抄』などに注記されるように、茅屋はもともとからその場にあつたと考えられる。須磨の住居は、源氏の指図造営ではないと考える。

第二章「宇治八の宮邸の考察―「水にのぞきたる廊」を中心に―」では、宇治八の宮邸のうち、「水にのぞきたる廊」を中心に考察した。廊を川の間近まで設置するのは治水上難しいという池浩三氏の論がある。が、水に面した建築である厳島神社本社祓殿や琵琶湖の浮御堂が存在する。さらに、本文には現在でも河川工法に使用される楊が描かれており、写実的な空間を創出していると考えられる。宇治八の宮邸は、垣間見などの場面においても細かく描写されているので、建具や調度など丁寧に考察していく必要がある。

第三章「浮舟巻「橋の小島」の位置について―宇治川の水面の描写から―」では、「橋の小島」は穏やかな水面に位置することが分かった。少し舟を停めて匂宮と浮舟が鑑賞する「橋の小島」は、穏やかな流れに位置しており、急流の中にはない。宇治川には、匂宮が「あふみの海の心地」（総角⑤・二九三）と感じる舟遊びの場があつたのである。浮舟の邸から眺める宇治川と、「橋の小島」付近の宇治川は同様ではない。現在目にする姿とは違い、宇治川はかつて巨椋池に注ぎ、幾多の島洲を作り、湖とも川とも言えない複雑な地形を形成していた。このような川の様相を正確に描写しているものと思われる。流れが速く荒々しい川、舟遊びをしながら優雅に行き交う穏やかな川、二つの特徴を持つ川であつたことを描き分けているのである。

『雲州消息』『平家物語』の示す「橋の小島」の位置とは別の場所に、紫式部は「橋の小島」をイメージして描いたのではないか。『源氏物語』の物語世界の中の「橋の小島」は、穏やかな水面に位置しているものであり、他資料に基づいての詮索は当てはまらない。『日本古典文学大系 源氏物語』に示されている「宇治橋の下流にある小島」説が妥当だろう。宇治橋下流に位置し宇治川が巨椋池に流入し流れが穏やかになる場所が、『源氏物語』本文の描写に適していると考ええる。

第一編では、六条院に関する本文に従って、できる限り図に反映する作業を開始したが、現在のところ齟齬をきたすような箇所は見当たらない。『源氏物語』本文に語られている事柄を図に盛り込む作業を行わずして、虚構の作品だからありえない描写もあると決めつけるのは早計である。六条院は、緻密な空間設定に基づいているのであり、その設定の上で物語を進行させていることが言えよう。六条院では、当時実際に行われていた儀式の数々が描かれ、物語に盛り込まれている。川本重雄氏「東三条殿復原図」は、古記録に掲載される儀式関係記事から復原された図である。従って、表側の建物については明らかとなっているが、日常使用する裏側の建物の詳細は不明である。『源氏物語』の描写から裏側の生活空間の様

子も覗うことができないか、今後の課題である。

第二編では、京周辺地の須磨や宇治が描かれる空間の考察を行った。周辺地における場面でも実地に齟齬をきたす箇所は見当たらない。むしろ、その場の川や海をよく観察し、物語空間に描いていると言えるのである。

寝殿造の邸宅は開放的であった。邸内の庭には池や遣水を配していた。登場人物たちは、庭の景色に思いを託し、歌に詠んでいる。そのため、寝殿造の空間がどのようなものであったか、検証を行って読み取る作業が必要なのである。

のどやかなる夕月夜に、海の上曇りなく見えわたれるも、住み馴れたまひし古里の池水に思ひまがへられたまふに、言はむ方なく恋しきこと、いづ方となく行く方なき心地し
たまひて、ただ目の前に見やらるるは淡路島なりけり。 (明石・②二三九)

明石の浜の館から源氏が眺めると、淡路島が見えるという。淡路島の景観から源氏は、古里の二条院の庭の池を思い出す。海辺の景色が庭の池を想起させている。また、瀬戸内に浮かぶ淡路島は、庭の池の中島に似通っているとも語られる。寝殿造の庭は、自然の景観を邸内に模したものである。

四季の趣に分けて造られた六条院は、京の風景のみならず、海辺・川辺などの周辺地の環境と融合した物語空間を創出していると言えるのである。

※『源氏物語』の本文引用は、特記しない限り、阿部秋生氏・秋山虔氏ほか校注・訳『新編 日本古典文学全集 源氏物語』(小学館、一九九四～一九九八年)により、引用箇所の巻名と頁数を引用末尾の()内に記す。

※「六条院想定図私案」は、川本重雄氏が作成された「東三条殿復原平面図」(『寝殿造の空間と儀式』中央公論美術出版、二〇〇五年)を参考にした。